

学生の視点から見た実習後の話し合いの意義

保育方法の原点を探るⅩ

上垣内伸子

(十文字学園女子大学)

1. はじめに

演者らは、これまで2年制の保育者養成課程における1年次の参加観察実習および事後指導のあり方について報告してきた(第51/52/53/55回大会)。

1年次の実習は基本的人間理解を目的としている。具体的には、後期に週1回隔週で養護学校幼稚部での参加実習(1回)と幼稚園での参加観察実習(3回)、翌週は実習レポートを基にした小グループでの話し合い(フィードバック授業)を行っている。実習自体の回数は少ないが、保育を振り返って話し合い、「省察」を実習の流れの中に明確に位置付けることにより、保育行為の自覚化が促され、保育者としての反省的態度が育つと考え、実習後の記録と学生一人一人に焦点を当てた話し合いに重点をおいている。フィードバック授業では、クラスを3分割した約20人のグループを3人の担当者が1つずつ受け持ち、参加者の中から毎回1～2名の実習記録を取り上げ、その記述から子どもと実習生の気持ち、関係等について考える。この実習後の話し合いに関しての私たち実習指導担当者の意図は、それぞれが自分の実習体験と重ね合わせながら意見を出し合うことで、保育後の省察を深め、子どもの内面理解と自己の行為の自覚化を促し、その時々自分の保育課題を見いだすことにある。

今回は、このような意図を持った実習指導が果たしてどの程度学生側に理解され、自分なりの意義が見いだされているのか、実習後の話し合いの有効性について探ることを試みる。

2. 方法と対象

1999年度入学の学生のうち1年次に埼玉県内の私立D幼稚園にて実習した8名を取り上げ、2年間のすべての実習が修了した2年次後期(2001年1月)に、1年次に行ったフィードバック授業を振り返り、実習後の話し合いを通して何を考え、どんな影響を受け、自分にとってどのような意味をもっていたかについて考えるグループ面談を行い、その記録を基に考察する。

3. 結果および考察

2年次の1月に行った8人の面談記録から、学生から見た実習後の話し合いの意義について整理し、考察する。(囲みは学生の発言記録)

①保育体験の共有と確認

話し合うことで、保育体験だけでなく保育中の不安な気持ちなどの感情も共有され、それが安心感と次の実習へ意欲的に取り組む態度の形成に作用する。

初めての实習なので、この実習の時は自分がどうしているか不安な気持ちだったり、関わりながらもいいのかなのということがたくさんあった気がする。それをこのフィードバックの話し合いなかで、同じ気持ちでいる人がいるんだなと気付いたりすることで、ちょっと落ち着けたり、安心できたりすることがたくさんあった。ひとりで不安だと何だか辛くなってしまうが、みんなも同じ気持ちなんだなとちょっと共感できるのが、私にとってはよかった。

②保育観の形成と洗練

話し合うことが、保育に対する自分の考えが形作られていくことを促進し、継続した話し合いの中でさらに洗練されていく。

今年(2年次)の実習をしながら、いろいろな人の体験も聞きたいと思った。1年生よりも2年生の方がいろいろと体験してきて、自分の考えもたくさん持っているとと思うので、どんどん意見が言い合える出せるような気がするし、みんなの意見を是非聞きたい。

実習を終えてしばらく時間がたって、ふり返る時間があって、あの時こうだったんだとか、そういうのをちょっと落ち着いた時間に話し合えるといい。実習直後の強く印象に残っていることだけではなくて、しばらくたつたあとで、小さなことでふっと思い出して、「ああ、あんなことがあったな」と考える、そういうこともけっこう大切なことだと思う。

話をしているうちにだんだん自分で考えがまとまっていくこともあると思うので、じっくり話してみたら、何かいろいろな考え方ができたりするのかなと思う。人と話しながら次第に自分の考えが形作られていく。

③保育者としての自分の成長・変化の契機

人の意見をとり入れて自分の保育を省察することにより、自分の保育の考え方や子どもに向かうときの態度が変化した。その自分の変容を保育者としての成長プロセスと肯定的に受けとめている。

友人の話を聞くだけでも楽しいと言ったらおかしいかもしれないが、自分と意見が違っても、それはそれとして肯定的に受け止めて、自分の中でじっくり考えてみる。人の事例や考えを知ることで、自分が体験した以上に保育の体験が広がる気がする。

友達の記録や発言が、自分は思いつかないことだったり、こういう考え方もあったんだなというのもあるし、自分はそれがいちばんいいと思ったけれど、友達は全く逆だったりもする。例えば、子どものためにというのはいまよくまとめることではないというような発言があった。私は最初に実習に入ったときには、先生という存在として入った気がする。素直に謝ったなどと、子どもの行動を評価する自分がいた。先生としていざこざもうまくまとめよう、まとめるのがいい先生だと考えていた。

いろいろな人の話が聞けるから、話し合いの機会が絶対あったほうがいい。「Eさん、それは違うよ」とか、「そういうかわり方はよくないんじゃないか」というふうにはだれも言わないけれど、話し合っているうちに、「ああ、私のあの関わり方はちょっと違ってたんじゃないかな」というようなことを自分で感じるようになる。

私は、けんか場面に出会うと、いつも同じような解決のし方をしていた。まずはお互いの話を聞いて、最終的には仲直りのような感じにもっていく。でも、もっと違う、謝るとか仲直りするというだけの解決じゃなくて、時間を掛けたとか、何か別の方法がもっとあるんじゃないかと考えるようになってきた。仲直りさせようと思っている私が話すと、仲直りすることを子どもに押しつけているような感じになるから、私が言う子どもは受け入れるしかないのかな、それで本当にいいんだろうかと考えるようになってきた。

④自分の体験と重ね合わせることの困難さ

自分の体験とは異なる保育事例や考え方が全く異なる意見に対しては、自分を重ね合わせて考えることは難しい。けれども、取り込んでおくことで、後の自分の省察の広がり深まりにつながる。

私と違う感性を持った人が、違う幼稚園で違う子ども達と保育をして書いたレポートから私自身が何を学べるのか、というと、自分が体験しているわけではないから、深く考えるところまではいかないが、友達の体験、その事例などを通して、自分はそのときどうするかということのを少し考える時間ができるので、その中で学べることもあるんじゃないかと思う。そういう意味で、いろいろな人の意見が聞きたいと思った。

私と違う感性を持った人が、違う幼稚園で違う子ども達と保育をして書いたレポートから私自身が何を学べるのか、というと、学べる点もあったけど、逆に全く自分と状況も何もかも違うと、自分のこととして考えられない。自分の意見がまとまらなかったり、どう考えていいのかも全然わからずに話し合いの場が終わる。けれども、そのとき分からなかったことに、ずっと後で保育して気付くことがあった。

⑤多面的理解の態度の形成

自分と子どもとの間でのやりとりやその時の気持ちについてのさまざまな意見を聞くことにより、人間の行動の多義性が認識され、多面的理解の態度が形成される

ナツミちゃんという子どもが、泣きむしとみんなから思われていて、でも私が実習に行った日にはリレーのときに最後まで泣かないで頑張って走れて、みんなが驚いたということがあった。ナツミちゃんに独占されるような形で1日一緒にすごしていた私は、「泣きむしの私」というのを私には見せたくないという気持ちで頑張って最後まで走ってくれたのかなと考え、そういうことをレポートに書いた。それに対して先生(実習指導)から、「ナツミちゃんが泣かないで頑張って走ったことについて、いろいろな角度から考えてみて」と言われ、そのことを考えたことが印象に残っている。それからいろいろな角度から考えるということがいつも頭にあったような気がする。

⑥“いま”“ここで”私が保育することへの認識

ある状況の中でその瞬間に自らが子どもとの関係性において考え選択し行動するという保育の一回性、独自性や、こうした瞬間の連続が保育であり、瞬間の質を高めることが保育の課題であると気づく。

だれかの意見に対しての考えを聞かれて答えた時に、先生が「言うのは簡単なんだけどね」と言い、ちょっと傷ついたけれど、実際に考えてみると、記録を書きながら後でこうすればよかったと考えると、すごくきれいにまとまる。後で自分で考えて、こうすればよかったと反省すること自体は大切なことだけれど、実際に次に同じような状況になったときには、反省したことをそのままやるというわけではない。状況はいつも違うのだから、個々の状況でその場で判断できないといけないということを感じた。

保育の後でいろいろ考えが出てきて、分かったような気になるけれど、同じことは起こらないわけだから、似た状況が過去にあったとしても、常に初めて出会った状況で、その場で考えて関わらなくてはいけないと思うようになった。

保育後に実習生同士で話し合う体験はどのような意味をもっているのだろうか。保育を学び実習を始めたばかりの時期の話し合い故に、その時には十分に言語化することが出来なかったり、自分とは異質な考えを取り込めただけどうまく消化されないままになったりするけれども、保育者を目指しての学びの初期時点で行ったこの実習についての話し合いの体験が起点となって、保育後に振り返って省察する態度が形成され、その後も継続して自分の中で考え続けながら実習を重ねていくことによって、さまざまなことに気づいていく。自分の中の過去と現在、自分と他者の保育行為と保育の思索が3次的に融合され、その人なりの保育観と保育スタイルが構築されていく。このように、考え続けることによって初めて、実習後の話し合いは学生が保育者として成長していく上で意義ある体験になりうるものであると考えた。